

兵士壮行式場跡の碑

「此処蓮花寺橋は天井川の広い川原で明治、大正、昭和三代に至り年毎の入営兵数時勃発の応召兵 下見村壮行式の恒常の場所であった。郷党が恒久の平和を念願し過去の戦争惨禍反省の縁にと之を建てる

平成六年十一月 下見平和を守る会」

移転した広島大学のある東広島市には、大きな川はない。右は、小さな黒瀬川にかかる橋の一つ蓮花寺橋のたもとにひっそりと建つ碑に刻まれている文である。大学キャンパスから約三キロメートルの所にあり、学生の生活圏内にあるが、人通りの多い道路沿いではないので、気がつく学生は少ないだろう。

広島大学文学部で開設されている教職関係の科目の一つ「総合演習」の授業が担当になったとき、右の碑文を教材として利用することにし、講義題目を「碑（いしぶみ）を読む」とした。その約一年前には、八世紀の遣唐使として中国に渡り、客死した井真成の墓誌が中国（西安）で見つかり、連日各紙で大きく取り上げられたし、その後も同墓誌に関する研究成果の記事が、次々と新聞に掲載され、一年以上経っても、続報が絶えない時期であった。

石に刻まれた文字・文を前にし、さまざまな考察が広がっていく。この碑は、いつ、誰が、どのような目的で、この場に建てたのか。この碑建立の立案、資金、実施についての具体的な経過は。この碑は、どのようなメッセージを、誰に伝えようとしているのか。メッセージを後世に伝えるとは、どういう人間の営為なのか。記録とは、文字とは、その手段は、言語とは、などなどである。

人間が、知識や情報を、その場にいない人、すなわち、当人（私）と、時間（今）と空間（ここ）を共有しない人、今、ここ、にいない人に伝える手段としての、本の歴史、印刷の歴史、紙の歴史などについては、別の時間（教養ゼミ）で扱っていた。そこでは、記録媒体（書写基体）としての岩、石、骨、亀甲、木の皮、木の葉、板、竹、蠟板、石板、粘土版、パピルス、紙、羊皮紙、など、記録する行為としての、彫る、刻む、書く、描く行為、その際に用いられる道具、鉄筆、葦の茎、角筆、羽ペン、筆、さらに、墨、インク、絵の具の歴史などが、学生に与えられた、というよりも、学生が自ら問題を見つけ出すテーマであった。さらに、文字の歴史、言語の歴史は、もう一つの大きなテーマであった。いずれも、身近なところに、研究につながるテーマが無数にあることを知ってもらうのが趣旨であった。

石碑の一般的な特徴と種類

碑の場合、文字が刻まれる対象は、もともとそこにあった自然の岩や大きな石が利用されている場合と、自然石や自然石に加工を加えた石または人工の石

を、その場所に運んできて設置したものがある。いずれにせよ、碑が現に存在しているその場所と、碑文の内容や碑建立の意図とが、密接な関係にある、ということが碑の最大の特徴であろう。碑は、文書や図書など、他の記録媒体と異なって、その場所から移動させることが不可能である。したがって、その場まで足を運んで、その場に立った人に対してのみ、メッセージが伝えられるのである。

どこの村、どこの集落、どこの地域にも、何らかの碑が存在していよう。したがって、どのような種類のどんな碑が、自分が住んでいる地域のどこに存在しているかを調べることは、その地域集団の先人の日常生活の営みのなかで、どのような人物の事績、どのような出来事が、忘却に抗って記憶され続けるべきこととして発信されているかを知ることになるであろう。すなわち、その地域共同体の歴史の特質を表していることが多い。

一人の人間がこの世の生を終えて永眠した場合に建てられる一般的な墓とそこに刻まれている墓碑銘も、広い意味での碑ではあるが、墓は無数にあり、そのみで一つのグループをなすので、ここでは扱わないことにする。ただし、その人の生涯が、何らかの意味で特筆に値する、特別な個人の場合には、墓碑銘や墓誌も取り上げることがある。

石碑にも、さまざまな性格のものがある。個人や団体の生前の功績を讃える顕彰碑、短歌や俳句、歌詞、文学作品の一部を刻んだ、歌碑、句碑、文学碑などもあれば、災害、事故、事件、などを記録した遭難碑、殉難碑の類いもある。大きく分ければ、個人または団体のなした事績のプラスの面を伝えようとする称揚碑と、その反対に、負の遺産を忘却から食い止めようとする教訓碑とがある。また、そのどちらでもない、歴史的事実を淡々と記したのものもある。例えば、入り組んでいた農地を、区画整理した事実、公道建設のため私有地が提供された事実、古くなった神社仏閣を改築、あるいは再建した事実などを記録した碑である。しかし、いずれの場合にも、平凡な日常生活の営みのなかに突如入り込んできた大きな出来事であり、忘却されるに忍びなく、自分たちよりも後にこの地で生活する子々孫々に伝えたいという強い意志が、その碑の実現の原動力となっている点は、多くの碑に共通している。

学生のレポートから

教室では、自分で調べた碑文（後述）について紹介した後、学生にレポートを提出してもらった。その中から、いくつか紹介させていただく。

ある学生（Mさん）は、JR西条駅近くにある御建（みたて）神社を囲む御建公園の片隅に、「檜高憲三先生 教育碑」を見つけ、まず、その碑文を紹介している。開かれた本の形をしたその石碑の冒頭には「檜高憲三先生／教育碑／森戸辰夫書」とあるそうである。碑文の引用中では、檜高憲三の略歴が紹介された後、「・・・前後実に二十有六年西条児童の教育一筋に身命を捧げられた 『何事も自ら進んで正しく強く優しく永くやります』との校訓のもとに提唱された『独創教育』は先生一生の理想であり世人敬仰的となった・・・教育を愛し

日本を愛し西条を愛された偉大な教育者 檜高憲三先生の不朽の功績を偲びこの教育碑を建設する 門下代表 石井武志謹書」と書かれている。Mさんは、これをもとに、『西条町史』などを繙き、檜高憲三という人物の生涯、西条の教育界で果たした偉大な業績などを調査した後、なぜこの顕彰碑が、どこかの小学校の校庭ではなく、ここ御建公園にあるのかを考察している。

長崎県出身のUさんは、天正遣欧少年使節の一人、千々石ミゲルの墓石発見のニュース（二〇〇四年二月二八日、長崎県多良見町教育委員会）をもとに、ミカン畑の一角にある墓がミゲル夫妻の墓で、息子の千々石玄蕃が建てたものであろうと推定された経緯、ミゲルの生涯、墓の建立、墓の存在が三七〇年近くの間忘れ去られていたことなどを、調べて報告している。そこには「ミゲル」「Miguel」の文字は無く、墓石の表側に「妙法 寛永九壬申年十二月 本住院常安靈 十四日 自性院妙信靈 十二日」の文字、裏側に「千々石玄蕃允」とあるそうである。千々石一族の関係者が、この墓石の戒名の主についての調査を、二〇〇三年十二月に依頼したのが、今回の発見につながったのだそうである。Uさんは、ミゲルの棄教と墓の存在とを関連づけて考えている。

鹿児島県出身のTさんは、加世田市の加世田平和記念館の敷地内にある三つの碑、「特攻慰霊碑 よろずよに」、「横田健一関西大学教授歌碑」、「青雲南溟の碑」を選び、特攻記念館内の遺影、辞世の句、遺言などとともに考察している。引用されている「特攻慰霊碑」の碑文には、次のような文言も見える。「・・・若き勇士たちは、祖国護持の礎たらんと、この地より雲表の彼方へと飛び去った、一機また一機と。往きて帰らざるものあまた、あるいは空中に散華。あるいは自爆。壮烈にして悲絶。その殉国の至誠は鬼神もこれに哭するであろう。終戦以来幾星霜、ここに祖国はその輝かしき復興をとげた。われら生き残りたるものと心ある人々は、英霊の魂魄を鎮め、その偉勲を称えんがために、ここにこれを建立する。」また、「青雲南溟の碑」の方には、「生きてしあらば青雲の志に燃え祖国を興隆し翔いたであろう若者に 国の危急存亡の時操縦桿を握らせあたら南溟に散華せしめたこの哀惜と痛恨を後世に伝う」とあるそうである。彼女は、中学生のときこの場所を遠足で訪れ、これらの碑に大きな感銘を受けたことが、今回のレポートの下敷きになっていたようである。自分と同じ年齢の青年のたどった人生に、改めて思いをはせるきっかけになったと書いている。

愛媛県出身のMさんのレポートの題名は、「削られた碑文—日露戦役記念碑」というものであった。郷土（宇摩郡土居町）のある神社の庭に当の碑はあり、「日露戦役記念碑」という横書きの文字は何とか読めるが、その下の碑文はすべて削られていて、文字の痕跡は見えるが、一文字も判読できないそうである。彼女は、この碑の建立の経緯、碑文を撰した人物のなしたこと、思想、生涯、碑文削減の経緯、にもかかわらず石碑そのものは撤去されずに残されていることの経緯、文字を彫った石工、その丹精こめて彫った文字を、みずからの手で削らなければならなかった石工のこと、残されていた拓本も焼却されたこと、碑文の原稿の写しを持っている人がいて、辛うじて削られる前の碑文の全文が分

かったことなどを報告している。それによると、削られる前の碑文は、以下の
ようなものであったという。

「日露戦争から凱旋した藤原〔この石碑がある土居町の大字の地名＝筆者注〕
の軍人諸氏が予に其記念碑の文を請はれた 其人達は〔三七人の名前＝省略〕
の三十七氏で八人は負傷し 外〔二人の名前＝省略〕の二氏は討死されたので
ある嗚呼此部落僅に百七十戸それに此数多の人が出て征ったか 今更当時を回
想し戦慄せざるを得ぬ 由来戦争の非は世界の公論であるのに 事實は之に反
し戦は亦明日にも始まるのである 吁之を如何すればよいか 他なし 世界人
類の為に忠君愛国の四字を滅するにありと予は思ふ 諸氏は抑此役に於て如何
の感を得て帰ったのであらふ

明治四十年三月

安藤正楽題撰書

最初は「忠君愛国」の四文字のみが削られたが、その後全文が削減された経
緯も述べられている。

以上は、提出されたレポートの一部であるが、他のレポートも含め、みな真
剣に取り組んだ様子が伺えるものが多かった。そういう意味では、期待した以
上の学生の反応であった。多くの学生が、自分の故郷にある石碑、または、自
分が今住んでいる東広島市にある石碑について調べていた。石碑はそれが建て
られている場所と密接な関係があるだけに、これも期待したとおりの結果であ
った。

広島フランス人墓地記念碑

私自身は、以前から興味をもち、調査もしている、広島比治山にあるフラ
ンス人墓地の中央に立っている記念碑に刻まれている碑文を紹介した。

記念碑の背後の裏面に、次のような漢字の文が刻まれている。

殉國忠士之碑
一千九百年北清之役我陸海軍兵傷
痍疾病託諸廣島病院病院甘諾醫治
看護備極懇篤 獲痊癒矣而其遂不
起者若干則皆 于此焉因与本國崇
武仁兇協會謀茲建斯碑以表我兵殉
國之忠併紀日本帝國人敦于友誼云
大日本帝國在留佛國人識

（一千九百年北清ノ役ニ、我ガ陸海軍ノ兵、傷痍疾病セシモノ、諸（これ）ヲ
廣島病院ニ託ス。病院甘諾シテ、醫治看護備極懇篤ニシテ概（おおむね）痊癒
ヲ獲タリ。而ルニ其ノ遂ニ起（た）タザル者若干ハ、則チ皆此ニ葬ル。因リテ
本國ノ崇武仁兇（すーぶにーる）協會ト謀リ、茲ニ斯ノ碑ヲ建テテ、以ッテ我
ガ兵ノ殉國ノ忠ヲ表ス。併セテ日本帝國人ノ友誼ニ敦キヲ紀スト云フ。）

（この読み下し文は、富永一登広島大学大学院文学研究科長、尚志会理事のご

原野 昇 06/5/6 9:58

コメント: 6) この碑文判読に際しては、富
一登広島大学文学部教授のご教示を乞うた。

教示による)

正面と左右の両側面には、次のように、フランス語のみが彫られている。
正面

A LA MEMOIRE
DES SOLDATS ET MARINS
FRANÇAIS
DU CORPS EXPEDITION^{RE} DE CHINE
DECEDES A HIROSHIMA
EN 1900
ET EN RECONNAISSANCE
DU DEVOUEMENT AVEC LEQUEL
LES JAPONAIS
ONT SOIGNES LEURS COMPATRIOTES
LES RESIDENTS FRANÇAIS AU JAPON
ET LE "SOUVENIR FRANÇAIS"
ONT CONSACRE CE MONUMENT

側面

HONNEUR AUX BRAVES
MORTS
POUR LA PATRIE

正面の碑文の文意は、裏面のそれとほぼ同じであるが、直訳的に訳してみると、次のようになる。

「一九〇〇年に広島で死亡したフランス人兵士および水兵を追憶して、そして日本人が献身的にわが同胞を治療してくれたことに感謝して、日本在住のフランス人とソウヴニールフランセ協会とがこの記念碑を建立した」

側面のそれは、「祖国のために命を捨てた勇者に名誉あれ」である。

一九〇〇年の北清事変の際、中国で負傷したフランス人兵士約一〇〇名が、広島に搬送され、陸軍病院で治療を受けた。大半は完治して帰国したが、七名は看護の甲斐もなく永眠した。日本側は、祖国から遠く離れた広島ので無念にも倒れたこれら七名のフランス人兵士のために、比治山陸軍墓地の南端、絶景の地に、墓地を提供した。その七基の墓の中央に、在留フランス人、フランス本国の「スーヴニール・フランセ（フランスの記憶）」協会が、広島市民の協力を得て建立した記念碑に、右記の碑文は記されている。この間の経緯などについては、ほかで書いたことがあるので、ここでは割愛し、文献名のみをあげさせていただきます。ご興味のおありの方は、そちらをご参照していただきたい。

・原野 昇「広島フランス人墓地」、『仏蘭西学研究』二八号（一九九八年）、三〇—三九ページ。

・原野 昇「広島フランス人墓地の兵士について」、『仏蘭西学研究』三四号（二〇〇四年）、一——一ページ。